

# 寂聴記念会だより

題字 島田聖翠

## 発刊のご挨拶

新年明けましておめでとうござい  
ます。会員の皆様のご多幸と益々の  
発展をお祈り致します。  
さて、昨年発足しました瀬戸内寂聴  
記念会では、「寂聴記念会だより」を  
年2回発行することに致しました。

## 編集部座談会より

徳島在住の編集委員三人（生長まち、  
大石征也、竹内紀子）が一年を振り返  
り、今年の課題などを語りました。

生長 寂聴さんが亡くなつたとき、一  
生の間に人間とは、これほど膨大な仕  
事ができるのかと驚き、そしてその資  
料が徳島県にあるのも、素晴らしいこ  
とだなと思いました。

竹内 この一年は、執筆、展覧会、出  
版の手伝い、監修、シンポジウム、記  
念会の立ち上げ、イベント出演、記念  
碑制作の協力等、あらゆる仕事が押し  
寄せましたが、周囲の協力を得て、  
予定通りこなすことができました。た

だ、じつくり議論する時間も場もなか  
つたのが、記念会のみなさんには、申  
し訳なかつたと思います。「寂聴さん  
を後世に残す」という気持ちは、みな  
同じなので、今後いろんな方法を考え  
て、実践していきたいです。

大石 六月二十二日に記念会が発足  
した時、初対面の人が大半で、副会長  
を仰せつかったものの、緊張し、うま  
くやつていけるのかと不安でしたが、  
今では、だいぶなじんでき、先輩方  
を頼りにしています。ひとつ体制が  
できたと思います。欲をいえば、一堂  
に会して、熱く語れないのが残念です  
が、コロナの現状では仕方ありません。

生長 四月の寂聴塾の追悼の集いで  
は、塾生が若いときに寂聴さんに出会  
つて、それぞれが影響を受けて、人生  
を歩んでいるということを感じまし  
た。中村裕さんのドキュメンタリー映  
画では、最後の最後まで小説家だった  
ということを、改めて感じました。

大石 展覧会は、四月からの徳島県立  
文学書道館での追悼展が充実して見  
応えがありました。八月から東京、大

阪、京都でNHK  
サービスセンター  
主催の追悼展  
があり、十月に京  
都会場を訪れま  
した。十時に開場  
して、すぐ人が  
一杯になり、寂聴  
さんが京都の人たちに愛されていた  
ことを感じました。昨年一番の成果は、  
なんといっても、機関誌「寂聴」を命  
日に創刊できしたこと。中身の濃い内容  
になつたことに、自画自賛ではあります  
が、手ごたえを感じています。次号  
から、このレベルを保つのは容易では  
ありませんが、よいものを目指して、  
編集委員一同、叱咤激励して、やつて  
いきたいと思います。

竹内 ジャンルごとに紹介してもい  
いですね。小説だけでなく、職人をル  
ボした『一筋の道』や『十五歳の寺子  
屋道するべ』という本もあります。  
源氏物語ではジュニア向けの上・下の  
現代語訳も出しています。  
大石 一般向けには、公民館で源氏物  
語現代語訳の輪読会などもできるん  
じゃないかと思います。今年は、普及  
の方法を皆さんに考えてもらつたら  
いいですね。

生長 十月の「寂聴忌朗読会」は素敵

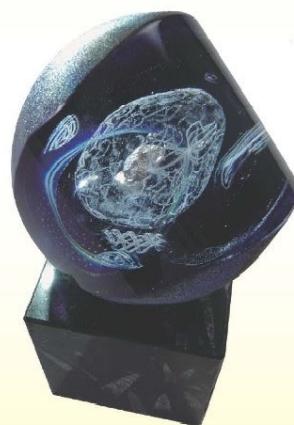
でした。あ  
ちこちで  
上演され  
たらしい

生長 十月の「寂聴忌朗読会」は素敵  
でした。あ  
ちこちで  
上演され  
たらしい  
し、継続し  
ていつた  
らしいと  
思います。

Vol.1  
2022.11

平野 啓一郎  
「未来の読者のための架け橋」

# 寂聴



機関誌「寂聴」創刊号表紙

作るのもいいと思います。

生長 中・高校生に向けて、どんな切  
り口で紹介し、研究してもらうかも考  
えたいですね。寂聴さんの隨筆は、と  
ても小気味よいので、なぜあんなに書  
けるのかも考えたい。

## 第1号

2023年1月15日  
発行 瀬戸内寂聴  
記念会

## 誤読のすすめ

—この社会を変えるために

米本 浩一

瀬戸内寂聴さんの一周忌に合わせたトーケイベントが十一月三日、徳島県立文学書道館で開かれた。瀬戸内寂聴記念会主催。同会の竹内紀子事務局長と私が「瀬戸内寂聴と石牟礼道子」の題で話をした。

徳島出身の寂聴さんと熊本出身の道子さん。全く縁がなさそうなふたりの共通項は「孤独」であった。小さきもの、虐げられた人たちへの全人格的共感という点でもふたりは似ているように思う。

水俣病患者の内なる声を聞き取り、『苦海淨土・三部作』を書いた道子さんは、『水俣のジヤンヌ・ダルク』と呼ばれた。支援団体の会長となつた元教師の日吉フミコは大物政治家にも臆さずものを言い、『火の玉』の異名があつた。巡礼姿で加害企業に位牌をつきつけた浜元フミヨ。混迷する患者団体をまとめた胎児性患者の母坂本フジエ……。枚挙にいとまがない。女性なくして水俣病闘争（一九六八～七年）はなかつたのである。

寂聴さんと道子さんが水俣で会つたのは七三年二月。水俣病闘争の終盤である。道子さんとの出会いを寂聴さ

んが回想した文章がある。道子さんの母ハルノさんについて多くの筆を費やしている。ハルノさんは食と情で寂聴さんをもてなした。

「豆ごはんと、野菜の煮物、新鮮な魚の干物の焼いたもの、どれも美味しくて私はものも言わずご馳走になり、当然のようになつた茶碗をお母さんの胸にさしだした。／「あんれ、まあ、このお方は：」／石牟礼さんの背を叩きながら、お母さんは子供のよう足をとんとん踏んで喜ばれた」（『東京新聞』二〇一八年二月二二日夕刊）。

石工集団を率いる父を支えたハルノさんは食べごしらえを無上の喜びとしていた。「取材などの成功よりも、不知火の海とお母さんの笑顔が、私の心にしつかり焼きついた」（同）。寂聴さんは、女性史研究家の高群逸枝の取材のため水俣を訪れたのだった。男性中心社会にヘキエキしていた道子さんは逸枝の著作で生きる意欲を取り戻した。道子さんは喜んで寂聴さんを逸枝の夫らに紹介したのである。

逸枝を仲立ちに、寂聴さん、道子さん、ハルノさんがそろつた日のことを私はトーケで「男性中心社会をぶつこわす、または搖さぶるための、女性たちの決起集会のおもむき」と表現した。一種の誤読であるが、データラメでもない。

世界経済フォーラムが七月に発表したジェンダーギャップ（男女格差）

指數によると、いわゆる先進国の中では日本はダントツの悪さだ。韓国や中国、ASEAN諸国よりも下の一六位である。女性に依存しておきながら、主導権は男性が握るという、いびつな構造の社会。なぜ変われないか。切ないまでの寂聴さんと道子さんの思いは次世代へと受け継がれるだろう。

一周忌は過ぎた。寂聴さんに心を寄せる人たちが、読書会や朗読に取り組むという。寂聴さんはテキストの中にいる。読み落としていることはたくさんあるはずだ。

よねもこうじ（作家、本会会員）  
一九六一年徳島県生まれ 福岡市在住  
二〇二二年十二月一日付徳島新聞「勁草を知る」より転載

二人のマグマ

元水 薫

寂聴さんと石牟礼さんの関係に興味を持ち、記念会のトーケイベントに参加した。

作家の米本さんが、「真逆のようないふたりが共感し合つたのは、二人が同じ根っここの孤独を持っていたことにあります。『苦海淨土』は、母が息子を、姉が弟を説き伏せるように語る。その言葉は一人一人の胸に沁み込み、心に刺さる。男性中心社会に鬪いを挑んでいる。そして、二人の生き方にも、共通のマグマがある。寂聴さんだけを見れば限界があるが、石牟礼さんを見れば、寂聴さんも見えてくる」と話されたことが印象に残つた。

寂聴さんは、晩年、石牟礼さんと渡辺京二さんの恋を書きたかったそうだが、残念ながら実現しなかつた。もし実現していたら、どんな作品になつたのだろうか。石牟礼さんはどのような女性に描かれ、その中に、寂聴さんは自分をどう投影させたのだろうか。私は想像を膨らませる。

それにしても、晩年の石牟礼さんに密着取材し、評伝も出版された米本さんが徳島出身ということで、寂聴さんと石牟礼さんの繋がりをより深く感じることのできたイベントであった。



11月3日 トーケイベント「瀬戸内寂聴と石牟礼道子」



## 『寂聴』創刊号の エッセイを読む

副会長 大石征也

年が明けた。皆さん、お元気ですか。

昨年十一月九日の一周忌にあわせた顕彰活動のシンボルとして注目され、著名な作家の寄稿が話題になつた記念会の機関誌『寂聴』。ここでは的を隨筆にしぶり、紙幅の許す範囲で、マスコミの筆が及ばなかつた掲載作を紹介します。

◎吉岡省二 「寂聴さんの万華鏡」  
ホテルマンの目に映つた寂聴像。イベント企画の仕事を通じて近づきを得た氏の、率直な人柄を感じさせる好エッセイ。

二十代後半に寂聴塾で聞いたインド体験の話、四十歳のときの同地への一人旅、そして現在をつなぐ随想。小粒だがキラリと光るさまは宝石のよう。

◎野田雄一 「いつの間にか誘われて」  
ガラス作家として大成した氏が、来し方をふりかえり、寂聴塾における瀬戸内氏の発言を克明に記す。初めは絵描きを志して斎藤真一の門をたたいたという模索の日々もしのばれる一篇。

◎生長まち 「今から ここから」

二〇〇三年開講の寂聴文学教室の受講生だった当時十七歳の私。最初の訪問が京都進学をうながし、京に住む大学生としての二度目の訪問につながっていく。心に人生の師をもつ人は幸いだ。

私は休むためや、眠るために今

生活を選んだのではなく、より一層、鮮やかな生き方と、生命の完全燃焼と、全き魂の自由を需めて新しい生活に飛びこんだのである。

「人間家族を捨てるまで」

婦人公論一九七四年九月号より

## 「寂聴のことば」から

◎那賀川眞理 「孤高の人」を読んで  
ロシア文学者・湯浅芳子との交流を描いた寂聴作品を取り上げた。この「一筋縄ではない人物」への親愛の情。読ませる。

◎三矢智子 「作家と作品」  
氏の次男の遍路日記が素材になつてゐるという掌小説「迷路」。虚実ないませる作家の創作方法がうかがえて興味ぶかい。

◎本田耕一 「タージ・マハルの思い  
出」

◎清重康代 「拝啓 濑戸内寂聴様」

寂聴塾で目にした師の美しい手、コンプレックスを感じていた自分の手、没後公開のドキュメンタリー映画を観ていて気づいた九十九歳の右手。定年後も聴覚支援学校で働く氏の、着眼点が素晴らしい。

◎鷺尾博子 「寂聴先生に伝えられたこと」

日航機墜落事故で妹を失つた氏は、昨年五月、三十年ぶりに御巣鷹山に登り、惨状の場が「聖地」に変わつたのを実感する。また、無常とは希望でもあると。今は亡き師に伝えたかったのはこのことだろう。

以上、駆け足ながら。

引き続き第二号への執筆を期待しています。

## 編集室から

次の「寂聴記念会だより」は五月一日の発行を予定しています。

会員のみなさんから、「寂聴」創刊号の感想や、近況報告をまじえた自己紹介等の文章を二〇〇字以内で募集します。

四月二〇日  
宛先  
瀬戸内寂聴記念会事務局まで

みんなで飛躍の年にしましよう。ご投稿をお待ちしています。

瀬戸内寂聴記念会 事務局  
〒770-0856  
徳島市中洲町3-40-802  
Fax 088-661-3292  
email norikomizugame@yahoo.co.jp

「人間は兄弟といえど、他人のはじまりだという節度が私は好きなんだ。自分以外はたとえ、親でも子でも他人だという思想の方が公平でいいように思う」という文章も前にある。また、フランソワーズ・サガンが来日して、出家した寂聴さんと対談したとき、「魂が自由になつた」という話にサガンがいちばん興味をもち、共感してくれたと語っていた。

事務局長 竹内紀子